第二話　カラスの恩返し

ある部落に、三人の息子が暮らしていたと。

海へ船出したり、裏山の畑耕したり、炭焼いたり、まあ、半農半漁で出来ることはなんでもやって稼いでいたと。

その日は、三人して畑仕事していたが、お昼になったので家さ帰ったと。その帰る道々でカラスが何羽もいて、えらく騒いでいたんだと。

「なんだや。カラス鳴き悪いな」

って語っていたんだと。カラスが鳴いて騒いでっと、だれか身内に不幸出るとか言われていたもんだからな。

「へえぇ。だれか死人でもあんだべか」

そう語り語りして歩いていくと、一羽のカラスが罠にかかって、罠の糸をはずすべとして引っ張っているんだと。ところが、その糸が杉の木にからまっていて、どうにもなんねえわけだ。

「ははあ、これだな」

って、二番目の弟が助けようと思って、糸を引いたら糸がはずれてな、こんどは杉の木のてっぺんまでカラスと糸といっしょに飛んでいって、てっぺんに引っかかってしまった。

「さあ、これは困ったぞ」

「どうする」

「このまんま見過ごしてもいかれねえべ」

って、なったわけだ。そうして、一番下の弟が身が軽いから、

「おめえ、木さ登っていって、糸をはずしてやれ」

となったんだと。

上ではカラスが、集団になってガーガーガーと騒いでいる。

「ようしっ」と登っていったたけえ、その杉の木、上さいくほど細くなっていて、折れそうだと。

「こりゃ、いけねえ」ってことで、そばに並んでいたもう一本の杉の木を、こっちに寄せて二本にまとめて、そうして、上へ上へと登っていったんだと。

そうして、からんでいる糸を歯で引きちぎってやって、飛んで

いくカラスさ向かって言ったんだと。
「これから、春には定置網を刺すんだが、どうか大漁にしてくれよ。あんたを助けるから、おれどこも守ってけれよ」
って、大声で叫んだと。だけんども、カラスには言葉がないから、下にいた兄たちが、
「わかった。わかった。かならず大漁にさせるから」
って、カラスのかわりに言ったんだと。
カラスは、カーカー鳴いて飛んでいったんだと。

そして、次の春になって、うちではコウナゴ漁を定置網でやっていたんだが、網を仕掛けて舟を出すと、カラスが二羽やってきて、その網さ止まるようになったんだよ。
いつも網のどこさカラス止まるようになって、カラスが止まってるときは、いつも大漁なんだよ。大漁満船でね、えらい繁盛したのしゃ。ほかの人の三倍も五倍も捕れてね、助かったっつうわけしゃ。
カラスは悪いほうさ行けば縁起の悪いことになるが、いいほうさ行けば、ものすごくいいもんなんだよ。